

葵 AOI

No.140

令和8年 秋

徳川美術館

THE TOKUGAWA ART MUSEUM



展覧会
紹介

P2~3

特別展

ときめく箱

エッセイ

P4~5

箱の楽しみ

歴史学者（日本文化史、茶道史）

熊倉 功夫氏

企画展

P6

生誕140年 没後50年記念
旅する侯爵 徳川義親

インタビュー

P7~8

美術館の次の100年を
支えるために

桐製印籠蓋箱（大名物「唐物肩衝茶入 銘 宗無」、内箱）
江戸時代 17世紀 徳川美術館蔵

徳川將軍家用に仕立てられた茶入の内箱である。目の詰まった柾目の桐が用いられ、蓋と身の合口部分は、金箔懸地とする。紐は浅葱色真田紐で、底部の紐通しには銀製の金具が添う。桐の温かな木肌と、合口や金粉字形の金色、真田紐の色調が静かに響き合い、清雅な気品が漂う。



特別展 ときめく箱

10月8日(木)～11月15日(日)

[前期] 10月8日(木)～10月27日(火)

[後期] 10月28日(水)～11月15日(日)

本館展示室

筆箱や小物入れから、家具、さらに家などの建造物まで、モノを容れる器である箱は、古くから人類にとって身近な存在でした。一方、旧約聖書に記される「ノアの箱舟(方舟)」・「契約の箱(アーク)」や浦島太郎伝説の「玉手箱(玉篋)」のように、特別な意味や役割を担う存在でもありました。

木材や石・金属・漆などの良質な材料に恵まれた地域では、多彩な工芸技術を活かした美しい箱がつくられてきました。なかでも日本では、箱そのものの造形や意匠に加え、箱に込められた由緒や、先人たちが大切に扱ってきた痕跡もまた、価値あるものとして受け継がれていま



青磁香炉 銘 千鳥 大名物 南宋～元時代 13-14 世紀 徳川美術館蔵
[伝来] 徳川家康・徳川義直ほか 通期展示

す。また、多くの文化財が箱に収められて今日まで伝えられてきたように、箱は文化財保存の基盤であるとともに、その歩みを物語る存在でもあります。本展はそうした「箱」にスポットライトをあてます。

さて、箱といえば、四角い形状の木箱を想起する人も多いでしょう。しかし、その登場は比較的新しく、植物の蔓や茎、皮などで編んだ籠が先行し、先史時代にまで遡ります。また先史時代には、木や石を削り抜いた箱も確認できます。日本で、四角い形の古い箱としては、弥生時代から古墳時代にかけての木棺・石棺が挙げられます。奈良時代には、牛や鹿などの革を漆で塗り固めた漆皮が隆盛をみるも、平安時代半ばには、工具と技術の向上にともない、木材に取って代わられ、その後、日本の箱は木板を主な材料として、さまざまな形態に展開していくこととなりました。



法華曼荼羅時絵経箱 鎌倉～南北朝時代 14 世紀 徳川美術館蔵
[伝来] 尾張家 通期展示



重要文化財 歌舞伎図巻 詞書 伝鳥丸光広筆 二巻の内下巻（部分）
江戸時代 17世紀 徳川美術館蔵 [伝来] 尾張家 前期展示（展示会期中巻替あり）



重要文化財 黒樂茶碗 銘 時雨 本阿弥光悦作
江戸時代 17世紀 名古屋市博物館蔵（森川コレクション）
[伝来] 平瀬家・下村西行庵・森川如春庵ほか 通期展示



杉木普齋竹茶杓 歌銘 田鶴 収納箱 江戸時代 17世紀 徳川美術館蔵 [伝来] 尾張家 通期展示

日本古来の木箱のなかで最も一般的なのは、桐箱です。桐箱の歴史は思いのほか浅く、遡っても16世紀頃の誕生と考えられます。室町時代中後期に、大材を縦に挽き割ることを可能にする大鋸と平坦な表面仕上げを可能とする台鉋が輸入され普及したことによります。こうして美しい木地を呈する桐箱が誕生しました。江戸時代以降は、鋭利な工具の発達とそれによる技術の向上から、箱は多様な形式・材で発展しました。

ところで、箱は長い歴史の中でさまざまな役割を担ってきました。実用的な機能としては、中身を衝撃や汚損から護ること、品物の整理・分類や運搬を容易にすることなどが挙げられます。一方、中身を箱に収める行為は、ときに他からの区別や秘匿を意味し、中身が特別な存在として位置づけられ、権威や価値を帯びることもありました。とくに

信仰の対象となる宝物を収める箱は、俗世と聖なるものを隔て、その神聖性を視覚的に示す、荘厳の役割を果たしたため、華麗な装飾が施されました。また、箱には中身の由緒や伝来、鑑定結果などが箱書として記され、中身の来歴や評価を今日に伝える媒体ともなりました。

こうした箱の中でも、優れた品には、相応しい箱が誂えられてきました。箱は、作品に合わせた特別な箱もあれば、各所蔵家の流儀に従い統一して仕立てられた箱もあり、そこには持ち主の美意識や約束事がうかがえます。近代には、益田鈍翁（孝。1848～1938）や森川如春庵（勘一郎。1887～1980）に代表される近代数寄者たちが、名品のために贅を尽くした箱を誂えました。数多くの箱や仕覆を伴ったその次第からは、愛玩の想いとその歴史がうかがえます。

本展は、作品の裏方として重要な役割を担ってきた箱を主役として取り上げる試みです。作品とともに護り伝えられてきた箱の機能と美しさ、そして文化財を未来へ伝える営みのなかで果たしてきた役割に、あらためて目を向けていただければ幸いです。（学芸員 加藤祥平）

エッセイ

箱の楽しみ

器物の保存のために箱に収納することは古代からあったが、それに署名したり由緒のような銘を記入することは、茶の湯が盛んになってからのことである。

そうはいっても武野紹鷗や千利休が署名した確実な箱は少ない。むしろ確かな署名といえど茶杓の筒書が先行するようだ。茶入や茶碗などの箱書が急激に増加するのは慶長年間(1596～1615)ごろからではあるまいか。織田有楽^{うらく}などは見事な箱書を残している。

箱は保存用のケースで、それ以上のものでもそれ以下のものでもない、という認識は、海外の美術館に収納される日本の茶道具の保存状況をみて強く感じた。保存用の木箱であるから安全な収納庫に納まれば不要というわけで捨てられる。大英博物館でもフリーア・ギャラリーでも裸で棚に並ぶ茶入や茶碗をみた。箱は捨てられなくとも、木製品として別のセクションに集められ、もはや元に戻せない。

日本ではそういうことは起こらない。箱は保存のためであると同時に、その道具の歴史を語る大切な資料だからである。そのことを積極的にすすめたのが小堀遠州^{えんしゅう}や千宗旦^{そうたん}といった17世紀初頭の茶人たちであった。その背景には新作の茶道具が大量に制作されたという状況があった。職人の手になる新作は、それだけでは頼りない存在である。しかしそれが著名な茶人によって佳品と認定されれば、大事な茶道具と

歴史学者（日本文化史、茶道史）

くま くら いさ お

熊倉 功夫

MIHO MUSEUM 館長

国立民族学博物館 名誉教授

1943年東京生まれ 東京教育大学卒業 文学博士

筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任。

2020年 京都府文化賞特別功労賞

2021年 京都市文化功労者受賞

2022年 文化庁長官表彰

2025年 アメリカ芸術科学アカデミー会員

著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和 うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉 千利休』、『熊倉功夫著作集 全7巻』、『茶道四祖伝書』等



して通用する。つまり、大量の新作から、これは好い、と認められた証明として銘をつけ箱に署名する。これで、茶の湯界で一人前の道具として通用することになった。

ことに遠州は流麗な筆致で、古今の名歌から言葉を選んで銘とした。これを歌銘ともいい、場合によっては本歌の和歌も箱に記した。茶の名人としての遠州。遠州が選んだ銘と歌。歌の背景にある王朝文化、と箱書からいろいろな話題が生まれ、茶の湯の興を盛りあげる。これを私は由緒の文化といっている。

日本人は由緒が大好きだ。各地の銘菓にも由緒がついている。曰く因縁故事来歴という類いだ。それがあると何かありがたく思える。つまりモノにはカタリがついて物語になる。箱書はその道具についての物語で、それが茶の湯の場をなごませ、道具の値打ちとなる。

由緒は箱書ばかりでなく附属品にも及ぶ。私が所持する萩焼の筆洗形の茶碗がある。元は近代数寄者高橋^{そう あん}箒庵の蔵品。これに箒庵の書状がついていて、実は箒庵から五世中村歌右衛門に贈られたことがわかる。箒庵は歌右衛門の家の設計もしていて親しかった。書状によると、歌右衛門が茶の湯をはじめようとして、箒庵に、自分の茶碗はどうかとみせにやったらしい。茶碗は箒庵の気に入らなかったようで「こんな茶碗は駄目。私が茶碗を一つあげるからこれではじめなさい」と、歌右衛門に贈ったのが件の萩茶碗。箱書にさらに物語がついて楽しみが増える。

茶の世界では箱書の楽しみが過ぎて、茶事が済むと箱書の山が登場して閉口することがある。ほどほどにしたいものだが、かつて箱書否定論者もいたことを忘れてはならぬ。その代表は柳宗悦^{やなぎむねよし}と小林逸翁^{いつおう}である。

柳宗悦は「民藝」という言葉を作った人で、それまで人びとに認められなかった民衆的工芸の美を主張した。彼は茶の湯を愛し、箱書がかもしだす、ゆかしさを認めてはいたが、箱書でものをみて、ものを直かにみることを忘れがちな現代茶人を批判した。それを誘導する箱書はなくてもよいといった。

小林逸翁は、やたらに箱書が生まれて道具界が混乱するのに嫌気がさして、箱書など、いっそないほうがよい、といった。しかし、逸翁のコレクションの道具にはほとんど箱書がある。

二人とも由緒の文化としての箱書を、秘かに認めていた。



萩焼筆洗形茶碗とその箱（土肥二三旧蔵）

箱にもいろいろある。茶入の場合、仕覆という名物裂の袋がつく。それも名物だと四つくらいもつく。この仕覆一つ一つに箱をつける。さらに添状とか由緒書などあれば、これも箱を作って添える。もちろん茶入そのものの古い箱も保存して別に新しい箱に入れることもあろう。こんなにたくさんの箱を一つの外箱に納めようとすると、小簞笥ほどの大きな箱になる。

松平不昧^{ふまい}は愛蔵した大名物油屋肩衝を参勤交代の道中携行するために負い櫃を作らせて不昧の乗る駕籠の脇を歩かせたというが、今も残る櫃は背負い帯もついた大きな箱である。

愛蔵品になると箱にもいろいろ工夫が生まれる。外箱をつけてまたそこに箱書をしてもらう例は多い。また箱の素材や形態に凝る茶人も少なくない。箱の材は桐が多いが、あえて杉や松、あるいは黒柿など、珍しいものもある。こうした工夫が茶人の楽しみであり、茶会で披露された時の客の楽しみでもある。

まさに箱の楽しみは茶の湯に欠くことのできないものといえよう。

企画展

生誕140年 没後50年記念

旅する侯爵 徳川^{よし ちか}義親

10月8日(木)～12月13日(日)

※会期中展示替えはありません。

名古屋市蓬左文庫 展示室1・2



右：八雲町指定文化財 這い熊 スイス 20世紀 個人蔵
左：八雲町指定文化財 這い熊 伊藤政雄作 大正13年（1924頃）個人蔵

徳川美術館と蓬左文庫の創設者である尾張徳川家19代徳川^{よし ちか}義親(1886～1976)は、明治から昭和時代にかけて、北海道・東南アジア・ヨーロッパなど国内外の各地を訪れ、その土地の文化や産業に関心を寄せました。生誕140年、没後50年を記念する本展では、旅先で撮影された写真や義親が日本に持ち帰った品々を通して、義親の旅の記録と文化活動を紹介します。

大正10年(1921)、義親は^{よね こ}米子夫人とともにヨーロッパへ向かいました。新婚旅行をしていなかった夫妻は、この旅を「旧婚旅行」と称し、ロンドンを拠点としてヨーロッパの17か国を巡りました。この旅は欧米への見聞を広げる機会であると同時に、夫妻にとってかけがえのない時間でもありました。船上で撮影された写真では、椅子に腰掛ける米子の傍らに、軽快な服装の義親が床に座り込み、2人が自然な笑顔を見えています。侯爵夫妻という肩書から想像される改まった姿とは異なり、長い船旅のひとつときをくつろいで過ごす、親密な空気が伝わる一枚です。



ヨーロッパ旅行から帰る
船上の義親夫妻
大正11年（1922）
個人蔵

義親はヨーロッパ旅行中の大正11年(1922)4月、スイスのベルンで木彫り熊を購入し、尾張徳川家と縁の深い北海道^{や ぐも}八雲へ送りました。八雲は明治維新によって禄を失った旧尾張藩士たちが移住し、開拓を進めた土地です。義親は、雪に閉ざされる冬の農閑期に、木彫り熊を農家の副業として役立てようと考えました。これをきっかけに八雲で木彫り熊の製作が始まり、やがて北海道を代表する土産品へと発展します。本展では、義親がスイスで購入した木彫り熊と、それを手本に八雲の酪農家である伊藤^{まさ お}政雄が大正13年(1924)に製作した「北海道第一号の木彫り熊」の2頭を並べて紹介します。2頭を見比べると、右前足から歩む姿勢や身体を覆う細かな毛彫りなど、手本を忠実に学んだことがわかります。義親が旅先で出会った木彫り熊が、遠く離れた八雲の人々の暮らしと結びつき、新たな文化を育てていったことを物語ります。

さらに本展では、義親が東南アジアで蒐集した品々や、インドネシアのジャワやジョホール（現・マレーシア ジョホール州）の王家との交流を通じて得た品々を展示します。また、東京目白の義親本邸玄関を飾っていた、各地の旅で集めた品々を当時の写真とともに紹介します。旺盛な知的探究心をもって世界を歩き、その経験を文化活動へと結びつけた「旅する侯爵」の姿をお楽しみください。（学芸員 長谷川円）

インタビュー

美術館の次の100年を支えるために

営繕・施設管理担当

鈴木 裕之



異色の経験を、美術館の力に

徳川美術館が90年の歴史を刻む中で、働く職員の顔ぶれも少しずつ変化してきた。かつては新卒採用が中心だったが、近年はさまざまな業界で経験を積んだ人材が加わるようになっていく。その一人が、営繕・施設管理を担当する鈴木裕之さんだ。服飾販売の世界から美術館へ。一見すると異色の転職に思えるが、前職で培った経験を美術館で生かしたいという思いを胸に、新たな仕事に挑戦してきた。

入職当初はミュージアムショップを担当。販売や商品企画の経験を生かし、オリジナル商品の開発や百貨店との連携による販路開拓など、新たな取り組みを進めた。

「当時のミュージアムショップの商品は、作品を切り抜いたクリアファイルや絵はがきなどが多く見られました。もっとおしゃれに、主張しすぎることなく、好きなものを自然に楽しめるグッズを増やしたいと思いました。」

その思いは、徳川美術館所蔵の刀剣をモチーフとした「とくびぐみグッズ」の開発にも生かされた。毎年テーマを変えてデザインされる華やかな数々のグッズは、多くの来館者に親しまれる商品へと育っている。

その後、担当は施設管理へと変わった。これまでと全く異なる分野の仕事だが、現場を見つめ、課題を見つけて改善していくという点では共通していた。



開発に携わった「とくびぐみグッズ」の一部

最適を考え続ける

「美術館のハード面を適切に管理することが私の役割です。」

鈴木さんが目指すのは、設備の故障や不調を修繕することだけではない。

「何が最適なのかを常に考え、将来を見据えながら、限られた予算の中で実現できる方法を探っています。」



情報ラウンジ(旧第6展示室)リニューアル工事風景

開館から90年を迎えた徳川美術館は、建物や設備も更新の時期を迎えている。雨漏りや空調設備の劣化・不具合など日々変化する施設の状態に目を配り、異常の兆候をいち早く察知することはもちろん、文化庁の文化観光支援事業を活用した館内照明のLED化や情報ラウンジのリニューアルなど、将来を見据えた施設整備も進めてきた。こうした整備には、設計会社や施工会社など、多くの関係者との連携が欠かせない。

「立場や考え方の異なる方々と方向性を共有し、一つの形にしていくことが、この仕事で一番難しいところですね。でも、その分やりがいも大きいです。相手に美術館のことを自分事として捉えてもらえれば、その分だけ美術館の環境に適した提案を引き出すことができるんです。」

施設管理を委託している設備管理会社との関係も、その一つである。鈴木さんが目指しているのは、委託先が主体的に判断し、適切に対応できる体制づくりだ。

「施設管理を委託している以上、最終的には私がいなくても対応できる状態が理想です。」

一方で、任せきりにはしない。提案内容や見積書は必ず自ら確認し、必要に応じて第三者の意見も取り入れながら判断する。

「任せることと、管理することは別です。本当に適切な方法なのかを確認し、責任を持って判断することが私の役割だと思っています。加えて、施設

管理は、人間でいえば健康診断のようなものです。設備は目に見えない部分が多いからこそ、異常の兆候を早期に発見することが何より重要です。日々の点検を怠らないことが、大きなトラブルを防ぐことにつながります。」

見えない場所で、美術館の未来を支える

施設管理の仕事は、来館者の目に触れることはほとんどない。しかし、その仕事があるからこそ、文化財は適切な環境で守られ、来館者は安心して展示を楽しむことができる。

服飾販売からミュージアムショップ、そして施設管理へ。担当する仕事は変わっても、鈴木さんが一貫して大切にしてきたのは、「お客様により良い環境を届ける」という思いだった。

「快適な環境で展示をご覧ください、『また来たい』と思っていただける美術館につながりたいと思っています。昨日より今日、今日より明日。美術館を守り、未来へつなげるために、一つひとつの仕事を積み重ねていきたいですね。」

文化財を守る環境も、来館者が心地よく過ごせる空間も、日々の地道な点検と改善の積み重ねによって支えられている。目には見えない仕事の積み重ねが、文化財を守り、来館者の安心を支え、徳川美術館の次の100年を支える力となっていく。

PROFILE

すず き ひろ ゆき
鈴木 裕之



昭和54年(1979)愛知県生まれ。

服飾業界などを経て、

2012年2月より徳川美術館にて勤務。

趣味：バスケットボール・コーヒー

公益財団法人 徳川黎明会
活動支援基金寄附者名簿

個人

— 敬称略 —

ア	赤堀康彦	コ	小林春子	ナ	長尾茂行	ム	村井俊哉
	秋田節子		小宮山敏和		長澤大悟		村上賢瑞
	浅井みちよ		近藤昭彦		長澤弘宣	モ	持留宗一郎
	朝岡多磨美	サ	齋藤恵美		中田英雄	ヤ	八神 基
	麻生由香		櫻庭茂大		南雲和江		柳澤由希
	阿部隆夫		佐々木剛志	ニ	新美達也		山岡さおり
	雨宮秀樹		佐藤孝之		西尾千歳		山崎久登
	有賀和子		澤 貴弘		西 光三		山本英二
イ	井口正俊	シ	柴田耕志		西田佳子	ヨ	横地浩史
	石原嗣治		清水恵五		西村敏子		吉川正子
	石山秀和		白根孝胤	ハ	橋本暢子	ワ	和田義弘
	伊東與有三		新崎 鈞		服部はるみ		
	岩下哲典		新崎美至子	ヒ	平田米男		
ウ	上野秀治	ス	鈴木要一郎		平塚泰三		
	内田裕美	ソ	染木知夫		広瀬千明		
オ	大石浩哉	タ	高木俊輔	フ	深井雅海		
	大島真理夫		多賀屋福子		深谷比呂美		
	大友一雄		高山慶子		福島佐千男		
	岡田健児		滝 正		伏屋重晴		
	奥川忠洋		田代和生	ホ	堀井邦彦		
カ	笠井 朗	チ	千葉晃泰	マ	前田種男		
	川島孝一	ツ	辻 智美		松尾美恵子		
キ	岸 拓也	テ	手代木絵夢		松崎麻美		
	貴布根楯雄	ト	徳川喜壽	ミ	宮島宏子		
	金 リンダ リ		富田和枝		宮田励司		

(令和8年9月20日現在)

(株)オリエンタル イベントクリエイターズ

(社)茶道裏千家淡交会 愛知第二支部

名古屋徳川ラインオンズクラブ

宗教法人 高岳院

一般社団法人 坂文種報徳会

合同会社 むらやま

株式会社 山本油店

(令和8年9月20日現在)

活動支援基金のお願い

寄附の用途・・・ 徳川美術館および徳川林政史研究所の作品購入、収蔵品に関する修理・研究調査・教員普及および環境等の整備補充に活用させていただきます。

寄 附 金 額・・・ 個人 一口一万円～
法人 一口十万円～

ご支援方法・・・ 下記、①または②のいずれかの方法でご支援いただけます。

- ① 右記QRコードをスマートフォン等のカメラで読み取り、
必要事項ご記入の上、お振込みください。



【支払方法】クレジット・コンビニ・銀行振込みより選択いただけます。

- ② 所定の振込用紙で郵便局または銀行からお振込み頂けます。
振込用紙の送付をご希望の方は当館寄附係まで御連絡ください。
【徳川美術館 寄附係:052-935-6262】

徳川美術館

THE TOKUGAWA ART MUSEUM

